



TITLE:

あとがき

AUTHOR(S):

CITATION:

あとがき. 東南アジア研究 1965, 3(3): 211-211

ISSUE DATE:

1965-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55103>

RIGHT:

あ と が き

「東南アジア研究」も通巻11号を数えるが、いよいよ軌道にのってきたと考えてよさそうである。各界からの活発な寄稿によって、原稿枚数は予想をはるかに上まわった。おかげで、せっかく原稿をいただいておりますながら、今号には掲載しきれず、次号にのばしていただくようお願いするようなこともあった。飯島茂氏、矢野暢氏の論文がこの犠牲になっている。ここでおわびしておきたい。

なお、ここでは次の二つのお知らせをしておかねばならない。一つは英文レジュメにかんすることであり、他の一つは現地語の表記法についてである。

英文レジュメにかんしては、今号から原則として廃止することにした。編集上種種難点が大きいからであるが、今回、これを付してくださった水野、三谷、森下、南の各氏にはこの無断の処置を特におわびしておきたい。御承知のとおり、すでに当センターでは欧文の Report on the Scientific Result of Research なるものを別途出版しているが、これが広く内外に成果を公表するための機会を与えるものとなっている。今回の処置は、各位の貴重な研究成果はいずれこの出版物をつうじて、より完全なかたちで発表されるものと期待したからである。

次に現地語のとりあつかいであるが、努力したにもかかわらず、あいかわらず不統一をまぬがれなかった。実にやっかいな問題である。そこで、今回から一つの試みとして次のような方法を採用してみることにした。すなわち、地名は同一論文内で初出の時のみカナ書きとローマ字書きを併用し、以後はカナ書きのみとする。人名はきわめて特殊なものが多いだけに統一した表記法は事実上不可能なことが多く、したがって執筆者の表記法をそのまま採用する。外国語普通名詞もこれに準ずる。編集者としては、執筆者の特殊な要求がないかぎり、この原則で、できるだけかたちを整えることにつとめた。

しかし、結局でき上ったものは決して満足なものとはいえなかった。諸賢の忠告をいただいて、より完全なものにしてゆくつもりである。

編集作業はセンターの石井米雄、高谷好一の両名がおこなった。(高谷記)

執 筆 者 紹 介

水 野 浩 一	京大・東南ア研・研修員	藤 吉 慈 海	京大・人文科研・助手
三 谷 恭 之	京大・大学院・文学研究科	吉 良 竜 夫	大阪市大・理学部・教授
森 下 薫	阪大・名誉教授	穂 積 和 夫	大阪市大・理学部・助教授
田 川 基 二	京大・理学部・助教授	服 部 共 生	京都府大・農学部・助教授
岩 槻 邦 男	京大・理学部・助手	古 川 久 雄	京大・大学院・農学研究科
南 勲	京大・農学部・助教授	川 口 桂 三 郎	京大・農学部・教授
喜多村 浩	ECAFE・調査計画部長	河 津 一 儀	京大・農学部・助手
Kasem Udyanin	Dean, Dept. of Political Science, Chulalongkorn Univ.	小 林 達 治	京大・農学部・助手
Kasem Suwanagul	Assistant prof., Public Administration, Chulalongkorn Univ.	猪 木 正 道	京大・法学部・教授
西 田 龍 雄	京大・文学部・助教授	本 岡 武	京大・東南ア研・教授
		戸 田 圓 二 郎	アジア救済協会・医務部長
		渡 部 忠 世	京都府大・農学部・助教授
		桂 満 希 郎	京大・大学院・文学研究科